元朝祕史に見ゆる蒙古の文化

元の太宗窩闊台汗の時代に編纂せられた忙豁侖紐察脱察安即ち元朝祕史は、蒙古の崛起時代に於る一般史實の上から見て、最も古き、また最も貴重な史籍たることは今更曰ふ迄もないが、その言語史上に有して居る價値も決してまたこれに劣るものではない、蒙古の名は蒙瓦・蒙兀等の文字によつて唐代から既に見えて居るにしても、その言語としては祕史以前に遡るものはない、從つて蒙古の歴史として此の書が占めて居る位置は、當然また蒙古語史の上に於る位置として認めなければならぬ次第である、さてこの今日から知り得る最古の蒙古語で書いた最古の蒙古史の中に記されてある蒙古の文化は、此の民族固有の文化として認むべきものであらうか、故那珂博士は此の書の和譯なる成吉思汗實錄の序論第六九頁に「又蒙古の古語は沙漠の外に獨立して、漢語楚語の影響を少しも蒙らず純粋清淨なる處女國語なり（以下割註）支那印度の文物宗教の影響を受けざりしは、國語の獨立よりも珍しきことなれども、本論の外なれば、こゝには言はず」と述べ、祕史の中に見ゆる數千の名詞の中にて漢語の轉訛と覺しきものは兀眞（ウヂン）が夫人の轉、大石（タイシ）が太師の轉、領公（リンクン）が令公の轉の類に過ぎずと說かれて居る、漢語楚語の影響、また支那印度の文物宗教の影響は、博士の斷定せられた程に些少でないかも知れないが、少くとも大した影響を受けて居たとは思はれない、然しながら果して祕史の蒙古語が博士の說かるゝ程純粋清淨な處女國語で、またその文物が左